
俺と世界の人生—前編—

柿野 圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と世界の人生―前編―

【Nコード】

N4284P

【作者名】

柿野 圭

【あらすじ】

俺が気になる（恋愛的意味ではない）人、本田菊さん。彼の秘密を知った時、俺の人生は大きく変わる。

これは、俺と世界が繰り広げた物語、いや、人生である。

この物語はヘタリアのファンフィクションです。実在の国や歴史、本家様とは関係ありません。

前書き、もとい注意書き。【必読】

初めまして。柿野 圭です。

この「俺と世界の人生」は、オリジナルキャラを主人公とした、ヘタリアの二次小説です。

注意書きとして、以下の点を挙げておきます。

まず、僕はヘタリアのファンになって間もなく、コミックス1巻2巻、本家サイトのマンガしか読んでいません（アニメは見ていません）。

ですので、ヘタリアの知識については乏しいため、一部、設定やキヤラが違っていたりする箇所があると思います。

また、歴史背景などについては、一応調べてはいますが、調べ足りない箇所もあると思いますし、ストーリーの都合上、誤魔化したりしている箇所があります。

そして、初心者ですので、表現が分かりづらい所もあります。

要は、ヘタリア的にも歴史的にもおかしい部分がある、自己満足な小説であるという事です。

「それでもいいよ。読んでやるぜ!」という寛容な方は、どうぞお読みください。

また、この小説は前編と後編に分けようと思います。

前編は原作メインの話、（きっと書くであろう）後編はオリジナルのシリアスな話の予定です。

高三という、とても忙しい身ですが（↑高三のくせに何やってるんだ! というツツコミはなしで）、頑張って更新させたいと思っています。

どうかよろしくお願いします。

前書き、もと注意書き。【必読】（後書き）

追記：活動報告の方では、裏話も書くのかなと思ってますので、よろしければ、そちらもどうぞ。

第零話

俺には、昔から気になる人がいる。

ああ、気になると言っても、恋愛感情的意味の「気になる」ではない。

不思議というか、謎というか、知的好奇心的意味の「気になる」だ。

俺がその人と出会ったのは十五年程前、俺がまだ幼い頃であった。その人の家は、俺の住んでる住宅街から少し外れた所にあり、住宅街を出ない限り、普通は滅多に見る事はない。

ましてや、子供は友達と遊んでいたりしているから、その家の存在を知る子供は皆無と言ってもいい。

しかし、俺は知っていた。

俺は友達がいなかったわけではないが、一人、探検をする事が好きだった。

そして、たまたま住宅街の外れを探検していた時に、見つけたのである。

とても大きな家だった。

住宅街に建つ家々より何倍も大きく——といえば大袈裟だが、当時の俺はそう思ったのだ——立派な家だった。

邸宅と言ってもいい。

この頃は、桜が満開に咲いていて、その風雅な姿は、この家の堂々たる姿を引き立たせていた。

まるで、一枚の絵のようだった。

俺は、その雅な光景の美しさに心奪われていた。

それから俺は、暇を見つけては、一人、何度もその家を見に行くようになった。

誰か友達に教えてもよかったのだが、自分だけの秘密にしたかったのだ。

そして、その家を見る度、どんな人が住んでいるのだろう、中はどうなっているのだろう、と色々な事を考えていた。

そんなある日の事である。

俺は、その家に向かっていた。もう何度目になるのか覚えていない。

桜は半分以上が散ってしまっていて、地面は花弁でいっぱいだった。

その家の近くまで来て、俺は足を止めた。家の前に誰かがいたのだ。

紺の長着を着た若い男の人。散りゆく桜を見ながら、家の前の花弁を箒で掃いていた。

この家の人だろうか。そう考えていると、男の人が俺に気づいて、目が合ってしまった。

「おや、こんな所に子供が来るとは。どうかしましたか？」

穏やかな笑みで、その人は言った。

今思えば、この時から全ては始まっていたのかもしれない……

おっと、説明ばかりしては面白くない。

そろそろ物語を始めようか。

第一話

昭和十五年九月二七日。

辺りの木の葉が紅葉^{だいがく}しだし、風雅な風景を作り出しているこの頃。俺は家を出て、大學^{だいがく}に向かう所であった。

俺の家は、大學から少し遠く、最初の講義を受けるには、早朝に家を出なければいけない。

そんな早い時間にもかかわらず、住宅街の外れにある、邸宅とも呼べる家に住むその人は、家の前を箒で掃いていた。

「おはようございます。本田さん」

俺は、その人に声をかけた。

紺の長着を着たその人は、俺を見て、

「ああ、おはようございます、^{こやう}勇君^{ゆう}」

と、微笑んで言った。

この人こそ、俺が「気になる」人、本田菊さんだ。

風雅なものをとても好んでいて、また物知りでもある。

世界についても詳しく、語学も堪能な人だ——この人がきっかけで、俺は今大學で語学を中心に学んでいる——。

一見、普通の人なのだが、この人には謎——あくまで、俺がそう思っている——が多い。

まず、十人以上は住めるであろう大きな家に一人で暮らしているという事だ。

「ぼちくん」と呼ばれる犬を飼ってるが、それ以外には誰も住んでいない。

たまに、多くの人が出入りするのを見かけるが、本田さん曰く「お客さん」なのだろう。

そんなに多くのお客さんが来るなんて、何者なのだろうか。

しかも、そのお客さんの中には、なんと外国人がいた事もある。

本田さんが言うには、昔、外国に行った経験があるらしく、外国人との関わりが多いらしい。

だから世界についても詳しいのだな、とも思うが、多くの外国人と関わりがある事自体凄い事である。

本当に何者なのだろうか……謎である。

他にも色々ある。挙げだせば切りがない。

しかし、どうしても「気になる」事が一つある。

他の謎を捨ててでも、どうしても解き明かしたい謎が一つあるのだ。

「……………どうしました？ 勇君？」

俺に顔をまじまじと見られている本田さんは、不思議に思い、聞いた。

「本田さんって……………今何歳？」

「……………秘密です」

「……………もう！ いつもそれじゃないですか！！ 一体いつになったら教えてくれるんですか？」

「ですから、いつかですよ。いつか」

「いつかって、いつも教えてくれないじゃないですか！！」

「世の中、知らない方がいい事もありますよ」

「“年齢”くらいで大袈裟な！！」

本田さんの最大の謎、それは年齢である。

前に書いたとおり、本田さんと出会ったのは十五年程前、正確には十七年前、尋常小學校じんじょうしょうがっこうに入っただけの頃である。

しかし、それだけ経ったにもかかわらず、その外見はあの頃と変わっていない印象を受ける。

童顔と言える幼い顔立ち。白髪一つない綺麗な黒髪。

真っ直ぐに下りた少し長い前髪が、この人をより幼く見せる。

出会った頃は高く見えた身長も、今では抜かしてしまった。

もし、俺と見比べたら殆どの人が、本田さんは俺と同じ年——ちなみに、俺は今二十三歳である——、または年下と思うだろう。

これは謎である。

それで、何度も年齢を聞くのだが、「秘密です」といつも教えてくれない。

「いつか教えてあげます」と言うが、いつになっても教えてくれないのだ。

「ところで、大學の方は大丈夫なですか？」

「え？ あっ本当だ！ じゃあ本田さん、行ってきます！！」

「行ってらっしゃい」

本田さんに見送られ、俺は大學の方へ駆け出した。
途中、ふと立ち止まり、振り返って、

「いつか教えてもらいますからね——！！！」

と叫んだ。

本田さんは、微笑んで小さく手を振った。

俺は、また大學に向かって駆け出した。

本田さんが果たして何歳なのか。

この最大の謎がもうすぐ解けてしまう事を、

解けてしまったが故、自分の人生が大きく変わることを、

俺、山崎勇^{やまざきゆう}はまだ知らない。

第二話

大學の帰り道、下町の市場を歩いていた時である。

辺りには、それなりに人がいた。

客を呼び込む店主、子供を連れて買い物に来た母親、中には、俺と同じ學生もいる。

賑わってる、と言えば言いすぎかもしれないが、平日にしては賑わっている方だろう。

そんな街中を歩いていた俺は、ふと足を止めた……いや、止まっ
てしまった。

恐らく、誰が見たとしても足を止めてしまうだろう。

何せ、道行く女性一人ひとりに男性が声をかけているという、日本では見かけない——実際、俺も見た事が無かった——光景を見てしまったのだから。

しかも、その男性と言うのが、癖のある褐色の髪で青い軍服を着た……どう見ても外国人なのだ。

何故、外国の軍人が日本で女性達に声をかけているのか。とても奇妙な光景である。

ちなみに、その男性の話している言語は、俺の得意分野である英語でも独語でもない。

どこの国の人だろうか。

「あ、山崎さん！」

一人の女性が駆け寄ってきた。

知り合いと言う程ではないが、よく見かける人だ。

「どうしたんですか？」

「あの人が私達に色々話しかけてくるんです。でも、何と云っているか分からないから困っています」

女性は外国人を指差し、言った。

確かに、話しかけられている女性達は困った表情で、誰か助けてくれないか、と辺りを見回している。

「山寄さん、外国語はお得意でしょう？ だから助けてくださらないかしら？」

「……………ああ……………成程」

予想通りな事だった。けれど、どうしたらよいだろうか。さっきも書いたとおり、あの外国人の言っている言語は分からない。

助けたくても、どうすればいいのかわからないのだ。

「山寄さん？」

「え？ ……あ、ああ。分かりました。何とかしましょう」

「あ、ありがとうございます！」

俺は、外国人に向かって歩き出した。

周りの人から見ると、冷静そうに見えるかもしれないが、俺は結構焦っていた。

何せ、俺の知らない言語だというのに……………

こうなったら一か八か……………

『ちよつと!』

俺は、外国人に話しかけた。英語で。

『何してるんですか?』

英語圏の国の人じゃなくても、英語教育が無いわけでもないだろう。

この人は軍人だし、もし位の高い人だったら、他の国の人との関わりがあるだろうから、可能性は高まる。

けど……女性達にでれでれた顔で話してるような人が、高い位の人とは思えないし、英語教育があるとしても、話せない人もいる。俺の勝手な推測だが、この人が英語を話せるとは思え……

『ヴェー! 君、英語話せるの? よかった、日本語分からねくて困ってたんだよ! 通訳してくれない?』

……なくもなかった。

第三話

その後、俺はこの外国人——後で分かったが、イタリア人らしい——の通訳をする事になったわけだが、彼が女性達に言うのは、「君、可愛いね」とか「名前なんて言うの？」とかそいつたものばかりだったのだ。

正直言つて、通訳しづらい。

当然女性達は、俺が通訳しても困惑するのであった……

しばらくして、通訳から解放され家に向かって歩き出したが、彼もついてきた。

聞くと、彼もこつちの方向に向かっているらしい。用事があるのだそうだ。

「じゃあ、何であんな事をしてたんですか？」

「え？ だって失礼じゃない？ 可愛い女の子がいるのに声をかけないなんて」

「……そういうものなんですか？」

「うん。俺んところでは普通だよ」

外国はよく分らない……そう思った瞬間だった。

「ふん……あ、そういえば、名前聞いてませんでしたね」

「あ、そうだね。俺はフェリシアーノ・ヴァルガス。フェリって呼んで。あと、全然ため口でいいよ」

「あ、じゃあ……俺はイサム・ヤマザキ。イサムでいいよ。よろしく、フェリ」

「うん。よろしくイサムっ！ ……あ、可愛い女の子！ ね、ね

「、今暇？ あ、イサム。また通訳してよ！」

お互い握手を交わした直後、フェリは視界に入った女性に、また声をかけ始めた。

これがイタリア人というものののだろうか……

本当に外国はよく分からない……そう思い、俺は溜息をついた。

その時だった。

「何やってんだ“イタリア”……！」

前方から男性の声がした。

見るとそこには、前髪を全部後ろになで上げた金髪に緑の軍服を着た、これまた外国人が立っていた。

少し遠くてよく分からないが、彼の後ろには白い軍服で黒髪の男性も見える。日本人だろうか？

「げ、“ドイツ”……」

金髪の外国人の言葉にフェリが突然動きを止めた。知り合いだろうか？

なんて考えている間に、彼は俺達の所に近づいてきた……と思うと、突然フェリに肩固めしたのだ。

あの……凄く苦しそうだよ……？

「お前、二時間はともかく、五時間も遅れてくるとはどういう事だ……！」

「ヴェー……！ だって日本の女の子かわい……ぎゃあああ……！」

突然の事にどうしたらいいのか分からず呆然としてみると、後ろにいた日本人らしき男性が……って、あれ？ この人……

「ドイツ」さん、もうよして下さい。“イタリア”君が見つかった良かったじゃないですか……って、……勇君？」

「本田さん……？」

白い軍服を着ていた男性は、本田さんだったのだ。

「本田さんって、軍人だったんだ……」

「あ……え、ええ、そうです」

そういえば、本田さんが何の仕事をしているか知らなかったけど、軍人だったなんて、ちょっと信じられ……

「ん？ “日本”。知り合いか？」

………なっ！？

「ちょ、ド、“ドイツ”さんっ！」

「？ “日本”、どうした？」

「っ！ ……ちょっと失礼っ！」

本田さんと金髪外国人が、俺に隠れて何か話している間、俺の頭の中はごちゃごちゃになっていた。

今、あの金髪の外国人は本田さんの事を何と言った？ “日本”？そして、フェリと本田さんは、この外国人の事を“ドイツ”と言った。

そういえば、フェリの事は“イタリア”と呼んでいたような……
何で、国名で呼んでいるんだ？

あだ名だろうか？　しかし、軍人同士で国名をあだ名にするのも
おかしい。

「い、勇君……さっきの、聞いてました……？」

「残念ながら、はつきりと」

「……ですよね。はあ……仕方ありませんね。君が見逃がしてくれるとは思いませんし……」

「今見逃したとしても、すぐに家まで詰め寄りますけどね」

「……全く、君の知的好奇心の高さにはかないませんからね……
…来てください」

本田さんはそう言うと、ドイツと呼ばれた外国人と、イタリアと
呼ばれたフェリを連れて歩きだした。

彼らの後をついていく間、俺は本田さんの事が何か分かるかもし
れない、という期待を持っていた。

けれど、それと同時に何か変な気を感じていた。

何だか、ここから先は踏み込んではいけないような……そんな気
を。

第四話

「……………はい？」

場所は変わって、本田さんの家の和室。
俺達は座卓を囲んで座っている。

さて、今がどういう状況か説明しよう。
今からほんの数分前。俺達が座卓に座ってすぐの事だ。

「それでは、よろしいですか？」

俺の向かいに座った本田さんが言う。
俺は頷いて肯定した。

「これは本来知られてはいけない事なのです。誰にも言わないと、
誓ってくださいますか？」

漆黒の瞳が俺を見つめる。
そこに、いつもの穏やかさはなく、鋭く真剣な眼差しだった。

空気が重い。

ここに来る時から感じていた事だ。
この空気の重さと本田さんの鋭い眼差し。これらが事の特異さを

物語っていた。

けれど、それだけ重要な事なら隠しておく事も出来る。
俺が聞いてきても、いつものように誤魔化せばいいだけだ。
しかし、それを話すという事は、俺を認めているという事ではな
いか。

それが、少し嬉しかった。

「大丈夫です。十七年の仲です。誰にも言いませんよ」

そう言つと、本田さんは小さく安堵の笑みを浮かべた。

「それを聞いて安心しました。……では、お話ししましょう。私達
の事を――」

そして、その後本田さんが発した言葉によつて、俺は頭の中に大
きな疑問符が浮かび上がり、呆然としている。
そんな状況だ。

「え、え〜と、本田さん？ 俺の聞き間違いでしょうか？ 今、凄
く不思議な事を言っていたような……」

「いえ、言っていないですよ」

「いや、言つてたでしょ？ 私達は……何ですって？」

「だから……私達は“国”なのです」

本田さんの表情は真剣だった。

さて、この本田さんの発言が全然不可思議じゃないと思う人、どこが不可思議じゃないのか説明してほしい。

そして、不可思議だと思う人、俺と一緒に叫んでほしい。せーのっ！

「おかしいでしょ！？ “国” って！ 本田さん、人間でしょ？」

「ええ、人間です。ですが、人間であると同時に“国”なのです」

「……分かりやすく説明してもらえますか？」

「そうですね……簡単に説明すると、私達は国の建国と共に生まれ、滅亡と共に死す人間。だから国同然なんですネ」

「……じゃあ、さっき“日本”とか“ドイツ”とか言ってたのは、自分自身が“日本”であり、“ドイツ”であり、“イタリア”であるから……？」

「そうです。物分かりが良くて助かりますよ。勇君は」

再び、呆然としてしまった。

信じられるだろうか？ そんな人間が存在するなんて……

「信じられないか？」

俺から見て、右に座っている金髪……もとい、ドイツ——でいいのだろうか？——が言った。

「だが、事実だ。それに、何もおかしい事ではない。例えば……犬という生物が何故存在するのか、分かったらどう？ だが、存在している。それと同じだ。様々な生物が普通に存在するように、俺達のような人間も存在している。おかしい事ではない」

近くにいた、ぼちくんを見て、ドイツは言った。

ぼちくんは、さっきまで俺の左に座っていたはずのフェリ……もとい、イタリア——どっちで呼べばいいのdarou?——と戯れていた。

「納得出来たか？」

「……まあ、一応」

正直、納得しきれていない……というより、受け入れがたいのだが、嘘をついているようには見えない。

「じゃあ、もし日本が“戦争で負け”……あつ！ 勿論、そんな事ありえないと思ってますけどっ！ もし、そうなったら、本田さんは“死ぬ”っていう事……？」

……今、俺は何と言った？

自分で言った言葉に、突然寒気を覚えた。

「いや、恐らく負ける事になれば、敵国の植民地にされるでしょうから、大丈夫でしょう。まあ、敵側の目的が滅亡なら、死ぬ事になりますね。勿論、負けるつもりはありませんが」

「……すみません」

最後の言葉が、とても冷たく聞こえた気がした。

“負ける”だの“死ぬ”だのと、人であれど国である彼に対して、随分不吉で失礼な事を言ってしまったのだ。

知的好奇心の高い俺だが、ちゃんと道德意識はある。

そんな俺が、このような発言が出来たのは、この非現実的な話の所為だろうか……

それとも、この話が織り成す妙な空気の所為だろうか……

実際の所、よく分からない。

ただ分かるのは、この話の異常なまでの特異さと、冷静さを失っている俺自身だった。

第五話

「まあ、そんな所ですかね」
「……………」

何も言えなかった。
言おうにも、言葉が見つからなかったし、探す余裕もなかった。

「頭の中が白くなる」というのはこういう事なのだな……
何も考えられない……
話の内容といい、さっきの俺の失言といい、何なんだ、これは……
もう何も分からない……ハハ

「ハ……ハハッ、ヒッ、フハッ……ハハッ、ハッ、ハハハハハハハ
ッハハハ！」

この時、俺の意識は無かったに近い。
自分が自分でないような感覚を持ったのを、今でも覚えている。
無性に嗤^{わら}い声を発して動いている俺の体を、客観的に見ている……
…そんな感覚だ。

「落ち着きました？」

「あ……、はい、すいません……………」

どれだけの時間が経っただろうか……？

気がつけば、俺は机に伏していた。

唾い疲れ、息が荒い。どれだけ俺は唾っていたのだろうか？

「大丈夫か？」

「大丈夫、イサム？」

ドイツとフェリが心配そうな表情で聞いてきた。

よく考えたら、人前であんなに唾っていたんだよね……

無意識とはいえ、恥ずかしい……

「うん、大丈夫。……ごめん。取り乱した」

「ああ、大丈夫ならいいのだが……」

「でも、何で取り乱したの？ 取り乱すような事した？」

「……うん、した」

きつと、認めたくなかったんだ。

彼らの不可思議極まりない話を。いつもなら、するはずのない失言をしてしまった俺自身を。

言うならば、後者が一番の要因だろう。

前に書いたが、知的好奇心の高い俺でも、しっかり道德意識はある。

相手が不快に思う事は、むやみやたらに聞く事はしない。物心つ

いた時からそうだった……

それなのに、してしまったのだ。

それも、本田さんに……幼い頃から仲が良く、大好きだった——
前にも書いたが恋愛の意味ではない——本田さんにだ。

ただでさえ、あの話で戸惑っていた所に、予想外の失言……

それに失望して、取り乱したのだろう……

でも、何だろう？ 思い切り嗤ったからか、頭の中がすっきりした。

さっきまでの自分が、とても……嗚呼、なんだか笑えてきた。

「ふふっ……」

「ッ！！」

「ヴェッ！！」

三人が、びくつとしたのが見えた。
それを見て、俺はさらに笑った。

「ははっ。大丈夫ですよ。少し……自分が馬鹿らしくなっただけです」

もう大丈夫。今なら、認める事が出来る。

第六話

その後、俺は色々な事を聞いた。

「という事は、今は無い国でも生きている人はいるんですね？」

「ああ。例えばプロイセン……俺の兄貴にあたるのだが、滅んだわけじゃないからな。今は俺の家に住んでいる」

気になる事は聞いてみた。

勿論、失礼にならないようには心掛けたが……

「それだと、中国は……」

「中国さんはそのままですよ。名前は何度も変わりますが、中国自体は変わっていませんからね」

「へ？」

「ほら、歴史の授業で、漢の時代でも清の時代でも関係なく“当時
の中国は……”って表現を使うでしょ？ つまり日本で言う、江戸
時代や明治時代みたいなもので、中国自体は変わってないんです」
「は、はあ……」

正直、理解出来ない所もある。

けれど、そういうものだと思え入れしかない。

この話に、「普通の」人間の常識は通用しないのだから……

それにしても、さっきまで受け入れられなかった事が、今では普

通に受け入れられる。

疑う事もなく、ずっと頭の中に入っていく。さっき嗤った効果だろうか？

普段の俺らしくはないが、まあ、いいだろう。受け入れる事が出来たのだから。

「じゃあ、“本田菊”とか“フェリシアノ・ヴァルガス”って名前は偽名って事……？」

「偽名じゃないよ。偽ってないからね。その名前は“人間”としての名前だよ」

「まあ、上司は国の名前で呼びますけどね」

それで、今は彼らの名前の話をしている。

「ふん……あ、そうだ。そしたら今後、俺はどっちの名前で呼べばいいですか？ さっきから迷ってたんですよね」

「人間としての名前の方がいいですね。他の市民に聞かれるといけませんし」

「分かりました。じゃあ、本田さん、フェリ、……………えーと……………」

「ルートヴィッヒだ。ルートでいい」

「じゃあ、本田さん、フェリ、ルートで」

そんな話をしていた。

その後も色々話していた。

ふと窓の外を見ると、空が橙色に染まっていた。少し話しすぎてしまったな。

「それでは、そろそろ帰りますね」

「えゝ、帰っちゃうのゝ？」

「うん。それに……三人で話す事があるんでしょ？ ……違いますか？」

俺は、ルートに聞いた。

「ああ。何故分かった？」

「何となく。フェリとルートが日本に来た理由を考えてたんですが、遊びに来たわけじゃなさそうですし、仕事関係なのは分かります。それに、ドイツとイタリアは今歐洲戦争——後の西部戦線——をしているはずですから、そのような状況であるのに、国自身が来たという事は……よっぽど重要な事ですよね？」

「……ああ。その通りだ」

「すいません。長く居座っていて」

「いや、構わない。予定外の事だったからな。仕方がないさ」

「はい。それでは……」

「あ、待って、イサム！」

俺が帰ろうとすると、フェリが止めた。

フェリは持っていた鞆から、何やら液体の入った瓶を取り出した。

「俺、葡萄酒^{wine}持ってきたんだ！ 後で皆で飲もうと思って。イサムも飲んでいかない？」

………はあ！？

これから重要な話するのに、葡萄酒！？

「待て、イタリア！」

ルートが止めた。それはそうだよ……

「これは酒だろ？ 俺はともかく、二人はまだ未成年だから飲んではいけないだろ！」

……ちよつと待って！！ そこ！？ 飲む気あるの！？
しかも、俺、未成年じゃないし！！

「あの……俺、一応、二十三なんですけど……」
「そして、私は最年長なんですが……」

本田さんも続いて言った………あ。
あの話に気を取られすぎて、俺が「今の今まで気にしていた事を、すっかり忘れていた……」

本田さんの年齢って……日本の成立がいつかは分からないけど、千年以上は生きてるんだよね……
それだけ生きてて、見た目が俺と同じ位って……

妙な沈黙が流れている……
フェリとルートは愕然とした表情のまま動かない。そこまで驚かれる事だろうか？

「……ぷつ、ははっ、何二人共々！ その冗談面白いつ！！」

フェリが突然笑い出した。
冗談って……そんなに幼く見えるのだろうか？
本田さんはともかく、俺まで……

というより、身長だけで見られている気がするの俺だけだろうか？

もし、そうだったら違っただろう。二人が大きすぎるから……あれ？

何だろう……？

どこからか……というより、近くで重苦しい空気を感じる……何だか……殺気のような。

……まさか！？

「人の年齢^{とし}を笑うとは……」

重く低い声が響く……

俺は、ちらつとその声のする方を向いた。

嗚呼、やっぱり……！

「これ即ち、その人のこれまでの人生を否定する事……誠に遺憾の意”……！」

すつと立ち上がる本田さん。

その手には……

「フェリー！ 逃げてえーーーーー！！！」

「ヴェーーーーー！！？」

「新刀“菊ヶ崎・改”を見せる時でしょうねっ……!!」
「日本っ!! 落ち着けっ!!」
「本田さん!!!! やめてえ——————!!!!」

しばらくして、なんとか本田さんを落ち着かせる事に成功した。

本田さんは非常に温厚な人である。

怒りなどの感情を表に出さなそうな人だ。

しかし、「仏の顔も三度」というか、やはり怒る時はあるのだ。
だが、その怒り方はとても異常なのだ。

何せ、あの温厚さが嘘のように、冷たい口調に加え、日本刀を搔^か
つ翳^{かき}すのだから……

俺は、本田さんと十七年の仲だから、何度かそういう現場に遭遇
した事がある——ちなみに、俺に怒った事はない——。
初めて見た時は怖かった。二重人格かと思う程に……

結局、葡萄酒は飲まない事になった。「また後日」という事だ。

第七話

翌日。

新聞にはこう書かれていた……

『日獨伊三國同盟成る』

『外交轉換ここに完成』

『世界新秩序の確立へ』

どうやら、昨日の夜、日本とドイツとイタリアが新たに軍事同盟を結んだようだ。

恐らく俺が帰った後、彼らが結んだのだろう。

その内容というのは、欧州におけるドイツとイタリアの指導的地位、大東亜における日本の指導的地位を互いに認め、歐洲戦争、日中戦争と関わっていない国が攻撃してきた時には、互いに援助し合うというものだ。

俺は、新聞を読み終えると、溜息をついた。

勿論、これまで様々な戦いで勝利を収めたドイツが味方になる事は心強い——イタリアについてはよく知らないが——。

だが、一つ気になる事がある。

今、この世界で行われている二つの戦争に「関わっていない」国。それは、きっと“アメリカ”の事だろう。

あくまで、これは俺の解釈だが、もしかしたらアメリカが戦争を仕掛けてくる事があるのではないだろうか。

そんな不安がよぎる。

だから、この条約が結ばれたのでは……そう思うのだ。

歐洲戦争、日中戦争、そこにアメリカが参戦してきたら……

俺が生まれたばかりの頃に、世界大戦争——後の第一次世界大戦——という戦争があったが、まさしくその再来ではないだろうか？

もうすぐ俺も大學を出て、この国と大きく関わる事となるだろう。そして、新たに起こるかもしれない戦争とも、何かしら関わっていくのかもしれない。

俺は、戦う事が出来るだろうか？

御国の為に、彼の為に……

「それでは、これから“もしもの時”に備えての訓練を始める！」

某日、某国の某所にルートの声が響く。

本田さんとフェリも軍服を着て、彼の前に整列している。

「では、まず兵士の基本の心得から……と言いたい所だが、その前に聞きたい事がある！……何故お前がいる？」

そして、俺もいた。

ちなみに、俺は大學の詰襟つめえりを着ている。

「すみません。彼、勝手についてきちゃって……」

「全く……遊びではないのだぞ！」

分かっている。俺だって真剣だ。
少しでも、彼の力になりたいから。
だから、本田さんが訓練に行くと聞いた時、無理を言って連れて行ってもらったのだ。

「承知の上であります、隊長！」

俺は大きく胸を張り、敬礼した。

「ねー、ドイツー。別にいいんじゃないの？ イサムも訓練に来たんでしょ？」

「そうそう。フェリ、よく分かってる！」

「あのな……まあいい。ただし、訓練を受けるからには真剣にかかれよ」

Yes, sir
「了解です！」

俺は、大きく敬礼した。

そして、訓練は始まった……のだが……

「まず兵士の基本の心得からいくぞ！ それでは、上官が歩いてきた時は？」

はい？ 結構簡単なものから始めるんだね。もちろん、敬れ……

「はい隊長！ イタリア人らしく、しかとして、歌歌って、飯食っ

て、寝ます!」

えーーーーーっ!?

「敬礼だ! きれい!」

今……フェリは何と……?

上司をしかと!? 「イタリア人らしく」って、イタリア人そう
するの!?

「あの……さっぱりついていけないんですが……」

俺の隣で、本田さんがルートに言う。

「右に同じく……」

俺も付け足した。

「いや、イタリアの真似はしなくて良いぞ」

「できるできる。日本とイサムならできるよ」

フェリが俺達の肩を叩いてきた。

嗚呼、余計に不安になってきた……

「で……できるかなあ……」

本田さんが頭を押さえて項垂^{うなだ}れている。

「同感です……」

俺も本田さんに同意した。

正直、俺も頭が痛い。

しかし、これは始まりにすぎないという事を、この後、思い知ら
される事となる……

第八話

嗚呼、頭が痛い……

訓練を始めて二十分程しか経過していないが、俺はくたくたに疲れていた。

案の定、ルートの出す問いに対して、フェリがおかしな解答——「イタリア人らしく」と言っているが、そういうものなのだろうか？——を出しては、怒られていたからだ。

けれど、それだけならまだ良かった。

もし、フェリがおかしな答えを言っても、俺達が正しい答えを言えばいい。そう思っていたのだから。

けれど……

「隊長！ 私は日本人らしく、『善処します』、『また今度』、『考えときます』と曖昧な返答をします！ ちなみに答えは全部『いい』です！」

嗚呼、本田さん。貴方まで……

確かに、俺も含め、日本人は曖昧な返事をよく使い、答えに「いい」も使うけど……

……でも、「敵が降伏を求めてきた時」に「善処します」や「また今度」はないでしょ！？

というより、こんなに顔を真っ赤にして、必死になっている本田さんを初めて見た。

という訳で、正しい答えを言えるのは、俺だけなのであった。
嗚呼、頭が痛い……

そして、訓練はまだまだ続く。
自分から参加していて何だが、早く終わってくれないだろうか……
……？

「では、もし何も持っていない時に、イギリスを発見したらどうする？」

イギリスというのは、彼らのような人間の事だろうか？
この問いは、俺でも答えられそうにないなあ……
答えを知っていたとしても、答える元気が無い。それくらい疲れていたのだ。

「よし、ではイタリア。答えてみる！」
「はい！ その時は木の棒とハンカチで白旗を作って振ります！
そして泣いて助けを求めます！」
「馬鹿者！ それでは負けてしまうだろ！ 日本、正解は！？」
「はい！ ウィリアム一世の鳴き声の物真似をする、です！」

はあ……

思わず溜息が出る。

というのも、こんな混沌chaosな光景が二十分も続いているのだ。

嗚呼、一体いつまで続……

「よし。ではイサム。ウィリアム一世の鳴き声の物真似をやってみろ！」

「えっ！？」

な、何ですか、その難題は！？

ウィリアム一世の鳴き声なんて知らないって。

というより、人間なのに鳴き声って？

「どうした？ 早くしろ！」

ルートが急かしてくる。

まさか、さっきの正解だったの！？ そんな馬鹿な…… 一体どうしたら？

でも…… やるしかない！

「うい…… ウィリアムっ！ ウィリアムっ！ イギリス王様ウィリアムっ！ ウィリアムっ！ ウィリアムっ！ ノルマン朝を開いたよー！」

「馬鹿者！！ その鳩時計みたいな鳴き声は何だ！ 大体、それでどうするのだ！？ 見つかってしまうではないか！」

「…… 何で俺が？ …… って、何笑ってるんですか、本田さん！ フェリまで！」

見れば、二人共腹を抱えて…… フェリにいたっては、尻餅までついて笑っていた。

「い、いや…… ふふっ、まさか…… こんな、事に…… ふっ…… なる、なんて…… ふははっ！」

「だって、面白いんだもん！ はははっ！！」

堪えていた笑いが、大笑いになって響いた——フェリは始めから笑っていたが——。

全く、何で俺がルートに怒られて、二人に笑われなければいけないんだ？

答えたのは本田さんなのに……

俺は、じつと本田さんを睨んだ。

本田さんは、未だ腹を抱えて、子供みたいに大笑いしていた。十七年の仲だけど、こんな本田さん初めて見た。

二人の笑い声を聞いていると、気恥ずかしくなってきた。

嗚呼、頭が痛い……

第九話

遂に一時間が経過した。

よくこれだけ耐えられたと思う。が、訓練はまだまだ続くのだ。そして、さらに新たな問題が……

「イギリスが“認知を迫ってきた”！ さあ、お前ならどうする！
」

もう、問いの意図さえも分からない……

今更気付いたのだが、これは“国である彼ら”の為の訓練であり、俺のような“普通の人間”向けの訓練ではない。

最初にやった“兵士の心得”は、学校で軍事訓練を受けた事があるから、大体分かるが、さっきからやっている“イギリス対策”は、完全に彼ら向けであり、俺にはさっぱり分からない。

よく考えればすぐ分かった事なのに、何故気付かなかったのだろう？ 焦りすぎたのかな？

「……とすればいいのだ！ 分かったか！」

「はあはあ……この訓練、なかなか為になりますね！」

「そうだね！ 俺もイギリスに会った時にどうすればいいか分かってきた！」

分からない……

イギリスを知らない事が原因であると思うが……

さすがについていけないので、ここから先の訓練は見学する事にした。

叢くさむらの近くで体育座りして、訓練の様子を見ていた。

それにしても、さっきの「認知を迫ってきた」もそうだが、「裸猫耳で迫ってきた」だの、「●●を迫ってきた」だの……

正直、イギリスって変態だと思うのは俺だけだろうか？

まあ、本当にやっているのかは知らないが……。後で本田さんに聞いてみよう。

そんな事を考えている間に、訓練ではイギリス対策の新たな問いが出されていた。

「では次！ イギリスがリオの謝肉祭carneval衣装で、腰を振りながら迫ってきたら、どう対処する！？」

ガサッ！

「わっ！！」

突然背後から聞こえてきた大きな音に、思わず声をあげて立ち上がってしまった。

「イサム、どうした！？」

「い、今、叢から……誰か……いる？」

「何!？」

ルートは叢に近づいていった。

一歩、また一歩と、近づいていく。

俺は、本田さんとフェリのいる場所まで来て、その様子を見守っていた……

ルートが、叢まで後数歩の所まで来たその時、ガサツと音がして、叢から何かが飛び出してきた。

「っ!!!」

「わっ!!」

「ヴェツ!!」

叢から出てきた“それ”は、俺達の方に走ってきて……俺達の前で止まって……

「にゃん」

鳴いた。

「……猫？」

「え？」

「ヴェ？」

「……」

叢から出てきたのは、猫だった。

「全く、驚かすな！」

「連合国の密偵かと思いましたが……」

「ヴェー、びつくりした」

俺だって、びつくりした。

でも、猫一匹だけにしては、最初に聞いた音は大きすぎるような

……

……まあ、いいか。多分気のせいだろう。

そして、訓練は再開され、俺は元いた場所で見学した。
さっきの猫を膝に乗せて。

しばらくして、カサツとまた叢から音がした。

見ると、小さな鼠が叢から出てきた。

猫といい、鼠といい、色々出てくるな……

この叢の先って、何があるのだろうか？

俺は、膝に乗せていた猫を地面に下ろし、叢を掻き分けた。

そして、固まった。

俺の瞳に映った“それ”もまた、固まっていた。

しばらくの空白の後、思考が働くようになった俺は叫んだのだっ
た……

「隊長！！ 本当に誰かいます！！！！」

第十話

「隊長！！ 本当に誰かいます！！！！」

俺がルートに向かって叫んだ、その直後だった。

ガサツ！！

「ヴェツ！？」

「イサムっ！！」

「勇君！！」

それは一瞬の事で、俺が叫んだ直後、背後の叢から出てきた“誰か”の左手によって口を塞がれてしまった。

そして、右手に持っていた何かを俺の首元に向けてきた。

それが何なのか、左手のせいでよく見えないが、それが放つ鋭い光で想像がついた。

短刀だ。
knife

「“イギリス”！！ 何故ここが分かった！？」

「ハッ、馬鹿だな。この大英帝国様に掛ければ、そんな事は朝飯前よ！ しかし、見つかるとは予想外だったな……折角、お前らの訓練を見届けてやろうと思ったのにな」

イギリス……？ こいつがイギリス？

俺の背後にいる為、顔は見えない。

見えるのは、俺の口を塞いでいる左手と、短刀を持った右手だけだ。

「イギリスさん。彼は関係ありません。放して下さい」

「そういうわけにはいかないな。見つかってしまったからな」

「……何が目的ですか？」

「この件の看過だ」

「出来るわけないだろう！」

「じゃあ、こいつがどうなってもいいと？」

「くっ！」

「卑怯だぞ、イギリス！！」

「ハハッ、今は戦争中だという事を忘れたか？ 戦争に卑怯も正当もないだろう？」

イギリスと本田さん達のやり取りは続く。

一方、フェリはというと、ルートの背後で……どこから持ってきたのか、白旗を涙目になりながら振っていた。

…… 本当にやるんだ。

…… って、そんな事を考えている場合じゃない！

俺は今人質になっているんだぞ！

一体どうしたら……

「さあ、どうする？ 看過するか？」

看過させてたまるか。

本田さんの役に立ちたいと思って来たのに、逆に迷惑が掛かってしまう。

しかし、短刀は俺の首元を向いている。

下手に動く事は出来ない。

本田さん達も何も言えずにいた。

それを見て勝ちを確信しているのか、イギリスの嘲笑が聞こえてくる。

「フツ……ならば、三つ数える間に決める。それで決まらなければ、こいつを殺す。……三……二……」

短刀が近づいてくる。

首元に触れる手前の所まで来た。

見えているわけではないが、感覚で分かる。

俺は焦っていた。

看過させるわけにもいかないが、その代償が俺一人の命だ。

どちらを選ぶべきか、決まっている。

それを分かっているのだろう、本田さん達の表情は苦痛に歪んでいた。

その表情に耐えられなくて、俺は目を閉じてしまった。

「……一！」

嗚呼……何も抵抗出来ず、ただ答えを待つ事しか出来ない自分が悔しい。

ただ俺は、「看過させたくない」と言う理性と「死にたくない」と叫ぶ本能の間で戸惑うしかなかった。

その時を悟り、閉じた目に力が入る。

嗚呼、俺はもう……

「待つて下さい!!」

その声に、思わず目を開いた。

「殺してはいけません。イギリスさん」

ルート、フェリの前に立つて、イギリスを睨む本田さんがいた。
本田さん、どうして……？

「じゃあ、看過を？」

自分の勝ちを確信したのだろう。

イギリスは俺の口を塞いでいた左手の力を緩めた。

この時、本田さんに感謝したいと思った。

おかげで、焦りで埋め尽くされていた頭が冴えてきた。

そして、冷静さを取り戻した俺は見逃さなかったのだ。

イギリスが短刀を俺の首元から放したのを……

「……分かりました。看過しま……」

「しなくていい!!」

俺は、イギリスの右腕を掴み、彼の右足を力の限り踏みつけた。

「がつ!」

痛みによる怯みから、短刀が右手から落ちた。

そして俺は振り返り、右拳をイギリスの腹に打ち付けた。

「ぶじっ!!」

イギリスはそのまま蹲^{うすくま}った。

その間に、俺はイギリスから離れ、本田さん達の所へ向かおうとした……

この時、俺は何も考えられない状態だった。

安堵感に溢れていたからだ。

もし、この時の俺に一言言つのならば、こう言つたら……

嗚呼、不覚……と。

「勇君!!」

何かに気づいた本田さんが叫ぶ。

俺もそれに気づき、振り向いたその時――

第十一話（改）

「ん……？」

目を覚ますと、何処か分からないが、建物の中にいた。
窓を見ればもう夜で、街灯もなく、とても暗い。

この部屋も、電気が点いてないので真っ暗だ。

そして俺は一人、椅子に座っていた。

そのまま眠っていたのだろうか？

しかし、何かおかしい。この、体が締め付けられている感覚は何だ？

見れば、腕を含め腹の辺りが縄か何かで、椅子の背に縛られているではないか。

手足は動かせるものの、全く身動きが取れない。

何故、俺はこんな状態になっているのだろうか？

確か、俺は本田さん達と訓練を受けてて、そこにイギリスが現れて、それで……

ズキッ！

「っ！」

腹が痛んだ。

押さえたくても、腕が動かせず、押さえられない。

……嗚呼、そうだ。

あの後、俺は隙を突かれて、イギリスに腹を殴られたんだ。
そして、気を失ってしまった……と。

俺とした事が、隙を作ってしまったとは……嗚呼、不覚。

ガチャ。

部屋の扉が開き、誰かが部屋に入ってきた。

よく見えないが、複数である事は確かだ。

一人が電気を点け、その姿が頭あいつになった。

「お、気がついたようだぞ」

どうやら彼らは五人で、今言葉を発したのは、整った金髪に碧眼、眼鏡をかけた背の高い……いや、訂正しよう。五人とも俺より背が高いが、その中で二番目に背が高い男。

他には、同じく金髪碧眼だが、髪は波がかつていて無性髭を生やしている男、銀髪で一番背が高く体格も大きい男、後ろで縛った長い黒髪に黒目、黄味がかった肌と、この中では唯一東洋人の……正直、男か女か分からない青年もいる。

そして……

「イギリス……」

ぼさぼさとした金髪に緑の瞳、少し太い眉毛。

あの時、叢の中で見たあの男、イギリスである。

「どうだ？ 捕虜になった気分は？」

イギリスは楽しそうな笑みを浮かべながら、近づいてきた。

「っ！ 来るな！！」

数分後……

「さて……君は何者だい？」

イギリスの誤解が解けて——ルートの言ったような事はしていないようだ、酒に酔って裸になったりと、変態な所はあるようだ……
——、一同が落ち着いた所で、眼鏡の男が言った。

「まさか、“満州国”かい？」

「な！？ そんなはず無いある！ 満州国は日本が作った名前だけの国あるよ！！」

「じゃあ、誰だ？ こんな奴、お兄さん知らないぞ」
「確かに見た事無いもんね……」

今の会話から想像出来るのだが、彼らも国だろう。此処にイギリスがいる事からでも分かる。

そして彼らは、俺の事を同じ“国”だと思っているようだ。

まあ、思わない方がおかしいか。本田さん達と一緒にいた訳だし。

「……そついや、日本はこいつの事、イサムって言ってたような……」

……まさかお前、一般人か？」

「「「え！？」」「」」

イギリスの一言によって、五人の注目が俺に集まった。

嗚呼、余計な事を。

覚えていなかったら、「自分は満州国だ」と言って誤魔化す事が出来たのに……

俺は何も言う事が出来なかった……

そしてそれは、質問の肯定を意味した。

故に、俺が普通の人間である事がばれてしまった……

その後、俺は彼らから質問責めにあつた。

名前、職業、親について……俺に関する事は全て聞かれた。

正直、答えたくはなかった。

勝手に攫っておいて、拷問される筋合いはない。

しかし、今は捕われの身。下手したら命が危ない。

昼間のイギリスの件も手伝って、命の危険に関して敏感になっていた。

それ故、答えざるをえなかったのである。

しかし……

「えーっと……整理すると、名は“イサム・ヨシイ”、“十八歳”、

“高校生”……だな？」

「ああ」

「彼らとは、“ただの友達”と？」

「そうだ」

「……本当か？」

「本当だ！」

正直に答えるほど、俺は馬鹿ではない。
ある事ない事を言って誤魔化したのだ。
命は惜しくとも、魂まで売るつもりはない。

ちなみに、“イサム・ヨシイ”というのは、歌人の吉井勇さんか
ら。

とっさに出てきたので、使わせてもらった。吉井さん、ごめんな
さい。

そして、高校生にしたのは、フェリが——後で分かった事だが、
ルートも——俺と初めて会った時、高校生位だと思っていたらしい
からだ。

個人的には複雑なのだが……そんなに小さいのか、俺は……？

「それで、彼らについて何も知らないと？」

「知らないものは知らない！ 年齢とか仕事とか聞いても、『秘密』
って誤魔化して、教えてくれないし……」

そして、質問の話題は「本田さん達との関係」となっている。
恐らく、ここが彼らにとっての本題なのだろう。

質問してくるイギリスの声のトーンが低くなり、イギリスの後ろ
で聞いていた四人の表情も、より真剣なものになっている……そんな
気がした。

理由は想像出来る。

「本来知られてはいけない事」を知っている“一般人”が存在す
るか否かを知るためだ。

「……だとさ、どう思う？」

「とにかく、英雄の俺がやつつけて……」
「そこじゃねえよ、馬鹿。こいつの話の信憑性だ！」
「えゝ？ 俺は全く嘘をついているように見えなかったんだぞ」
「俺も信じてもいいと思う」
「僕もそう思う」

当たり前だ。

自分の身元以外、全部実話なんだから。

本田さん達とはただの友達だし、「国である事」を除けば、何も知らない。

ところで、眼鏡の男は今「英雄」と言ったが、英雄なのか？ 何の？

「じゃあ、こいつを返しても問題無いか？」

「ないんだぞ」

「ない……な」

「ないと思うよ」

お、上手くいったみたいだ。

案外、出来るものだね。

安堵の溜息をついていた俺は、東洋人の青年が一人、黙って俺を睨んでいる事に気づいていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4284p/>

俺と世界の人生—前編—

2011年11月14日23時32分発行